

# キャンパス散策（正眼短期大学）



## 建学のなりたち

正眼短期大学は岐阜県美濃加茂市伊深の里、関山嶺の奥深きに位置する臨荆禅の天下に聞こえた鬼僧堂“正眼寺”の敷地内に一画をなしています。ここはもとより、臨濟宗妙心寺派妙法山正眼寺住職、正眼僧堂第九世梶浦逸外老師（後の臨荆宗妙心寺派管長、妙心637世）によって、今より54年前（昭和30年）、開山無相大師600年遠忌の記念事業として岐阜県美濃加茂市伊深町に創設された短大です。戦後の荒廃した世相を見て、「開山無相大師もし今日いましなば汝ら請う、其の本を努めよ。誤って葉を摘み枝を尋ぬること莫くんば好し」といわれるであろうと、逸外老師は「報恩底（恩に報いる行動）に何を求められるか」と自問され、それは法田を耕すこと。つまり法田とは仏教や禅の教えをひろめる場をつくることを指し、耕すとはそこに集う学生を教え導くことであると提唱されました。その結果、「仏教に関する専門の学術を研究し禅的精神によって人格を陶冶し、もって社会に貢献する有意な人材を育成することを目的とする」として今も行学兼備の真の禅僧や人材を育て世の中に送り出しています。

## 禅的教育による人づくり—「行学一体」—（知に偏ると足は弱くなる）

本学創設の一大目標である「行学一体の禅的教育による人づくり（禅的人間の育成）」は創立者—梶浦逸外老師の多年の祈願でありましたが、いつの世にも人づくりが叫ばれながら、高等教育機関においては行と学とを一体として同時に実践する場のないことを憂えていました。禅では「知に偏ると足は弱くなる」のたとえ通り、知的変調の者を嫌いますが、この見方は、知識が妨げになるのではなくて、その活かしかたが難しいことを指しています。禅はむしろ学問を尊重する気風は強いといわれています。

本学では学として一般教養科目の生命の尊厳、倫理と人間、宗教と社会福祉、科学と宗教、心理カウンセリング、日本の歴史と文化、健康科学、文学概論。仏教に関する専門科目として提唱・禅語録、仏教学の基礎、禅学の基礎、禅と人間、仏教の世界、



茶道 1



茶道 2



陶芸



少林寺拳法



合気道



農耕 1



農耕 2

禅と医学、禅宗史概論、禅学演習、禅宗經典研究。禅文化科目として茶道、華道、書道、陶芸、彫仏、武道として合気道、少林寺拳法、行としての実践科目は坐禅、ヨガ、作務、漢方薬草園、農耕、仏教ボランティアなどがカリキュラムに組まれています。

## 日常生活は坐禅三昧

まずは行一毎朝5時半になるとご〜んと鐘の音が鳴り響きます。寮で飼われている二匹の犬が一斉に鳴き始め、その声が放送に入ってくるころから、正眼ライフが始まります。禅堂に学生全員が眠い目をこすりながら集まってきます。一時間にわたる観音経などの経本を大きな声でよみあげ、その後静寂の中で自己をみつめる坐禅が始まります。足は痛いですがとても気持ちが落ち着く時間です。こうした一連の作法は

禅の古法に基づいています。この古法の基本原理は禅の実践（坐禅、作務、隠徳）を通して人間の精神を向上させることにあります。精神修養をすることによって教育をはかる正眼寺の伝統に基づいて方向づけられています。

本学の特徴はなんといっても坐禅に始まり坐禅に終わることです。現役学生から定年を迎え、第二の人生をスタートした社会人学生、カナダやサイパン、中国からの留学生もみんな一緒に



坐禅

なって座ります。理屈や言葉ではない静寂の中で自分をみつめ、落ち着く時間—自己究明—をもつことはすがすがしいと感じるのは、国境を越えて共通する自然のリズムなのかもしれません。自然のリズムに耳をそばだて、呼吸を調べ、心と体と知を調和させて一体となる瞬間をもつことは時間に追いまわられている息苦しい現代においては、贅沢で至福な必要な時間帯であることを痛感します。

## 仏教ボランティアは正眼の作務力発揮(禅・人間学科2回生 舘 満里子 記)

「作務」とは、掃除や作業、耕作などを通して「自己の内面を見つめていく」禅の修行の一つ（動坐禅）であります。本学では仏教ボランティア活動として「作務」を取り入れています。

内容は「トイレ掃除」「草むしり」「自分のしたい場所を掃除」「花壇作り」「ほうき作り」など多岐に渡ります。その中で道具を大切にすること、準備や後片付けの重要性も学んでいきます。ほとんどの学生がこの授業を取っており、毎週和気あいあいと授業に取り組んでいます。この自己究明で得た力を社会に貢献していく仏教ボランティア活動があります。

行う事柄は同じでも、「どんなふうに」「どうやって」作務をするか、人それぞれの個性が出ます。また、一人ではなく皆で行うことで協調性が生まれ、自分が今何をしたらいいのか考えることができるのです。この学校の特徴である「学生の年齢層が幅広いこと」も、人を見習うことの大切さを教えてくれます。普通の「掃除」と違うのは、目的が「自己の内面を見つめていく」ことにあり、掃除や作業の成果だけに拘らないことです。大切なのは自分の限界を決めず、発展させていくことだからです。しかし成果として、どの学生も卒業する頃には格段に「作務（掃除）力」が上がってきます。私自身、この学校に来てトイレ掃除が得意になったと思います。

また、このトイレ掃除は「作務」の授業だけに留まらず、地域と連携し公衆トイレなどを掃除する学校全体のボランティアとして活動しています。これは「作務」の授業で身に付けた力を地域や社会に活かす事ができる良い機会であると思います。

これからも、頭で考え工夫し体で経験するこの授業で学ぶことを、実際の生活に活かし、楽しい学校生活を送りたいと思っています。



ボランティア 1



ボランティア 2